

ある。それは、「魔女が倒れた。もうだめみたい。」と切り出される第一パートにある。主人公・まいが「エスケープ」という言葉を口にして草の上で思い切り伸びをする、そのシーンの直前のことだ。画面がモノクロに変わり、学校の教室の光景になる。周囲の生徒の様子は昼休みらしい騒がしさの中、制服姿のまいが一人机上の給食を目の前にしてじっと座っている。おそらくエコーをかけて歪めた女の子たちの笑い声が甲高く響く。むろん、その笑い声は、まいのものではない。まいは、無言である。三十秒あるかどうか。画面は、すぐカットされ、山上の草地に戻り、色彩もカラーに戻る。ああ、まいの回想だったのだな、とわかる。この後、「まーいー。」と呼ぶ声に振り向くと、バケツを高く掲げたおばあちゃんの姿が見え、「さあ、摘みましょう。」という掛け声によって、第一パートのハイライトといえそうなワイルドストロベリー摘みとジャム作りのシーンに移っていく。ここは、音響の勝利といってよい。音楽を控え、風、草のそよぎ、鳥のさえずり、二人の声、そしてバケツの底に落ちる苺の一粒一粒の音、その硬さの度合いまでわかる一音一音、それが心地良い。おそらく、このくっきりした小さな音が学校の喧騒（それは小さな声をかき消す）とコントラストをなすのだろう。

ところで、まいは、「登校拒否」をする。「不登校」とは呼ばれない。原作の初版が一九九〇年代だから用語が違

うと考えられるかもしれないが、まいは、「わたしはもう学校には行かない。あそこは、私に苦痛を与える場所ではないの。」と明言していて、この作品を貫く「意志の力」というモチーフが表われているように思う。けれども、なぜ、学校が苦痛を与える場所ではないのか、なぜか、母も祖母も聞かない。映画も原作も、後半のパートに入ってから、まいがおばあちゃんに理由を語るシーンがやってくる。「女子の付き合いって、独特なんだよね。」と。そういう女子のグループ同士が友好的になる方法もある。今度のクラスがそうだ。「みんな、だれか一人を敵に決めればいいんだもの。」この告白によって視聴者＝読者も、なにか苦痛だったのかを理解する。しかし、このシーンは、まいの言葉を通して説明がなされる。決して苦痛そのものを追体験させる描写がなされるわけではない。また、語りを取り乱したり錯乱したりすることもない。そのため、重苦しさはあっても、淡々とした印象になっている。そのクールさは、自分の感情をコントロールする「意志の力」を育てることこそ魔女修行だという、この作品のモチーフにふさわしいものだろう。逆に言えば、あのモノクロの回想場面だけが禍々しいのである。唯一まいの苦痛が像として表われる箇所なのだ。小説版に回想は、ない。ただ、「あの狭い教室の重く煮詰まったような人間関係に身動きもとれないような気がしていたのが嘘のようだ」という抽象的